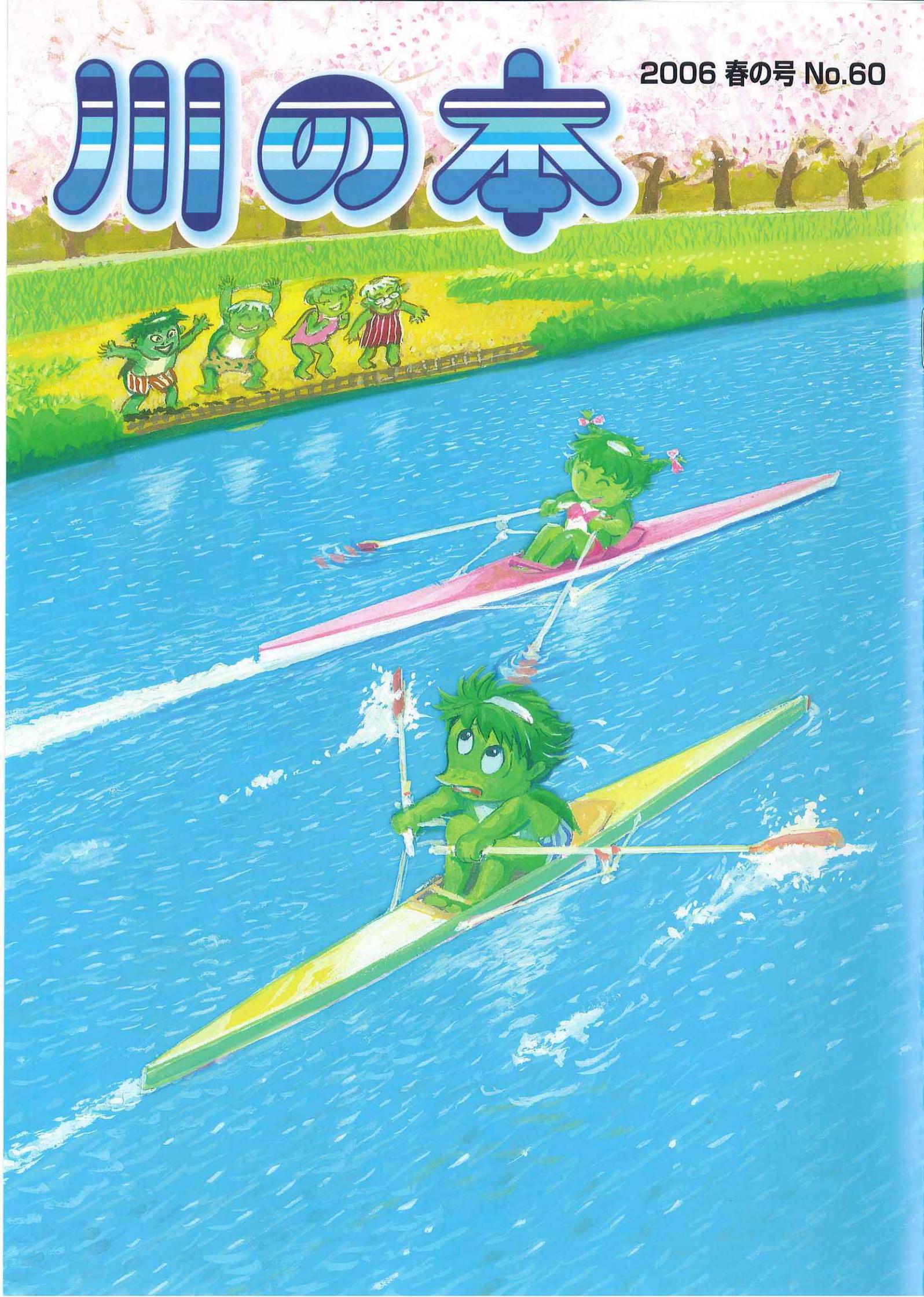
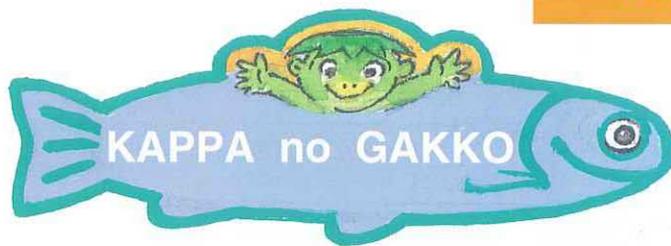


2006 春の号 No.60

川の本

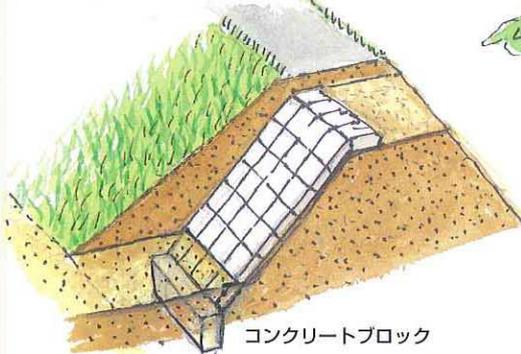




川の自然を豊かにする工夫いろいろ

わたしたちのくらしを水害から守るには、じょうぶな堤防をつくるなどの治水の仕事が必要です。でも川の自然がこわれては困るよね。だから川の仕事では、堤防や護岸などをつくりながら、川の自然をより豊かにするために、いろいろな工夫がなされているんだ。その一例を紹介しよう。

自然にやさしい、じょうぶな堤防
覆土
コンクリートブロックを土でおおって
けいしゃをなだらかにする。



コンクリートブロック



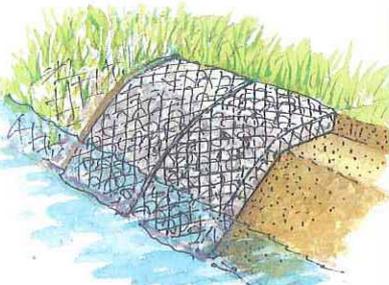
川の自然は
人の力で
まもるのね

フーン
こうなっていれば
もし洪水で
土が流されても
堤防はこわれ
ないね

草花も生えて
くるわね



多自然型護岸
石を鉄線のかごの中につめた
マット形のを、岸辺に敷
いて土をかけておくと草が生
えてみどりの岸辺ができる。



●ワンド

水のたまり場になっており、魚やいろんな生きものがすんでいる。

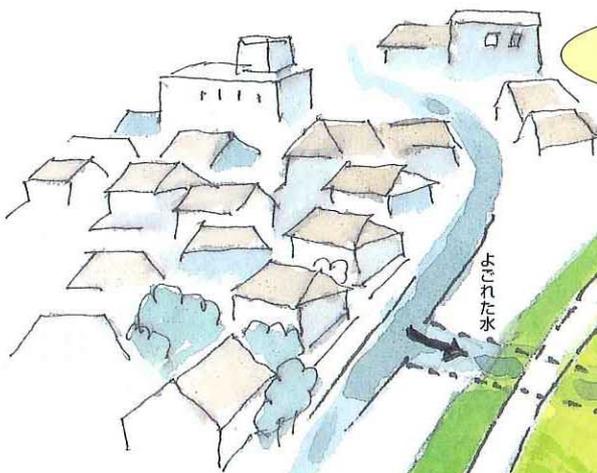
ワンドは人工的につくられているところがあるよ。



河原に樹木が多すぎると洪水のとき水の流れをさまたげるので木をとってもとの石の河原にもどす。

ワンドだけじゃなく川には自然がいっぱいあるよ。
自然観察や課外学習にもってこいの場所だ。

川はビオトープ

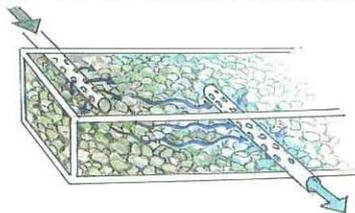


魚がすめる魚巣ブロックの護岸

きれいな水

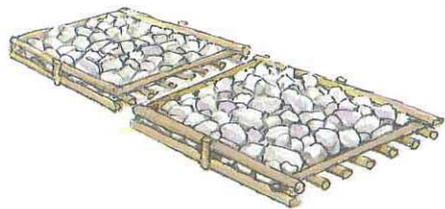
水質浄化施設

河川敷公園などの地下に、石などをつめた施設をつくって、水のをよごれをとる。



木工沈床

川底がえぐられやすいところに、木わくに石をつめたものを並べ川底をまもる。



あらかわ 荒川のカップ

埼玉県 荒川

むかし、荒川上流のうすぐらい道ばたに二人の旅人が急な病にたおれこみ苦しんでいました。ちょうど通りかかった近くの村人が家につれかえり、村の人たちとも力をあわせて介抱をしたので、いく日かしてやっと病もなおり、旅人は元気をとりもどしました。旅人の名は彦平といました。

彦平は、貧しいのに親身になって面倒をみてくれた村人たちに、どうすれば恩返しできるのかと悩みました。そして思いついたのが365日の願掛けをすることでした。さっそく荒川源流の山にもつた彦平は

「天の神様、どうか村の人たちが幸せになりますように」「
と雨の日も風の日も雪がふっても休むことなく祈りつづけました。

そして365日目の満願の日、ついに彦平の祈りは神様に通じたのです。神様は村人を幸せにする神の使者として、荒川の水しぶきから生まれたばかりの男と女の双子のカップをさすけてくれました。よろこんだ彦平は太郎と花子と名づけました。太郎と花子はみるみる元気な子供に成長しました。いっぽう彦平は厳しい行を経ていつしか仙人になっていました。

ある日のこと彦平仙人は太郎と花子の双子カップを呼びよせて、

「太郎よ花子よ、おまえたちがきてくれたおかげで、わしは安心して天にのぼることができ、わしがいなくなっても村の人たちのこと、よろしくたのむぞ」と

いって、雲を呼び、ひらりととびのって天たかくきえていったのでした。

さて、太郎と花子は荒川の淵にすみついて、なかよくくらしはじめました。そして彦平仙人との約束どおり、村のためになることならなんでもやりました。それもつそりやりましたのでだれも気がつきませんでした。村の子供が川でおぼれていたときなど、太郎と花子のカップは力をあわせてたすけあげ、子供のせなかをたたいて水をかけたので子供は元気になりましたが、たまたまそれとおくから見た村人は、カップが子供をいじめていると思いきや、たまたまそれとおくから見た村人は、カップが子供をいじめていると思いきや、たまたまそれとおくから見た村人は、カップが子供をいじめていると思いきや、たまたまそれとおくから見た村人は、カップが子供をいじめていると思いきや、たまたまそれとおくから見た村人は、

「ちかごろこのあたりに、悪いカップがすみついてな、子供を川へ引きこみにきよるぞ、カップを見つけたら殺してしまえ」などとありもしないうわさがひろがりはじめました。双子のカップが村のためになることをしたくても、見つかれば棒をもった村人においかまわされます。双子のカップはちよつとさびしい思いをしていました。

それから いく日かしたある夜のことでした。

荒川の土手の上にあられた一人の老人が、白く長いひげを風になびかせながら、こわい目つきで村のほうをにらみつけ

「つむ、近ごろの村人ときたら川の水のありがたさを忘れたようじゃ、水を粗末にするわ、川をよごすわ、なつとらん。荒川をなめたらごんごんことになるか、竜神のおそろしさをおもいしらせてくれようぞ」と、

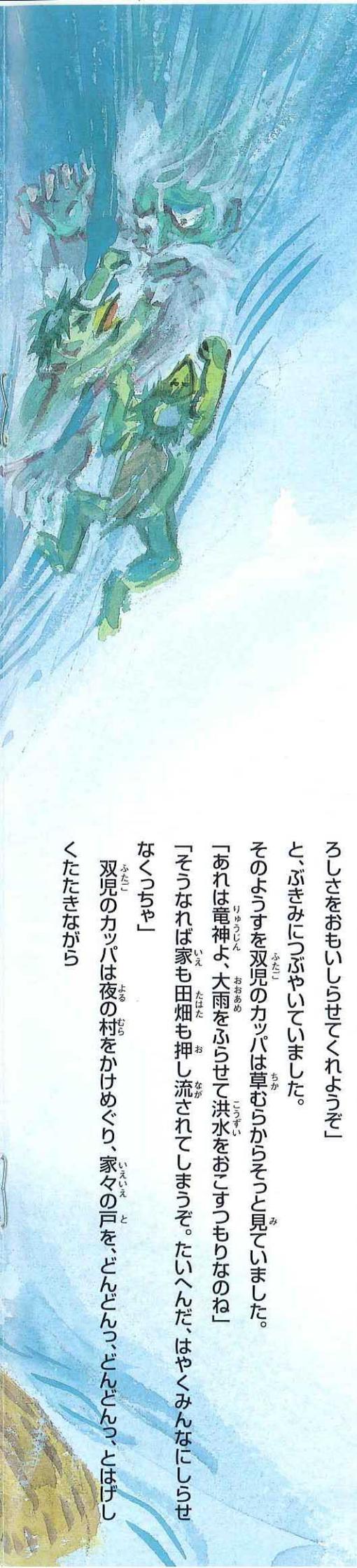
と、ぶきみにつぶやいていました。

そのようすを双子のカップは草むらからそと見ていました。

「あれは竜神よ、大雨をふらせて洪水をおこすつもりなのね」

「そつなれば家も田畑も押し流されてしまつぞ。たいへんだ、はやくみんなにいらせなかつちや」

双子のカップは夜の村を駆けめぐり、家々の戸を、どんとどんと、どんとどんと、とはげしくたたきながら



「大雨がふって大洪水がおこるぞ、はやく逃げる支度をしなさい」とさげびつづけました。

しかし村人たちはカッパを悪いやつと思いきんでいましたから

「また、カッパがいたずらをはじめよつたな、ゆるさんぞ」

とカッパめがけて物をなげつけ、だれもカッパのいうことを聞かずとほしませんでした。

ところがあくる日、空いちめに黒い雲がひるがり、夜かと思うほど暗くなってきました。

そして大粒の雨がはげしく降りはじめたのです。まるでバケツをひっくりか

えたような雨は、ますますはげしくなるばかりです。荒川の水は牙をむいた龍のよ

うに荒れくるい、とうとう土手を切った濁流が田畑や村をおそいはじめます。

「たすけてくれえ 家が流されそうじゃあ」

村はもう大さわぎです。

そんなようすを見ていた双児のカッパは

「いくらなんでも龍神はやりすぎだ、こんな乱暴やめさせなきゃ」

そついうと双児のカッパは、黒い雲にむかつてとびあがって行きました。

「龍神、やめなさい」「やめろ、いいかげんにしないかあ」

小さくてもカッパは天の神の使者です、すごい力で、どすん どすん と龍神に体

当たりをくりかえします。これにはさすがの龍神もまいてしまいい荒川の淵ふかく逃

げこんでいきました。今にも流されそうな家の屋根の上で泣き叫んでいた村人にも、

カッパの活躍は、はっきりと見るこゝができました。

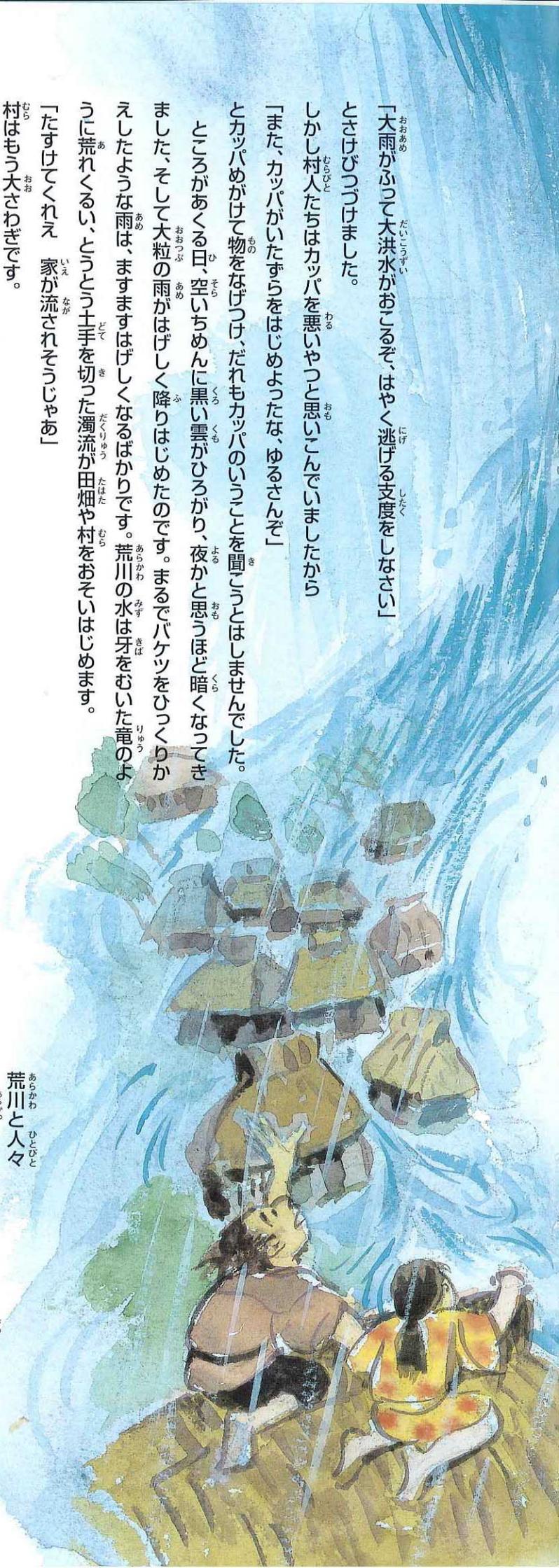
龍神がいなくなると、うそのように空は晴れわたり、あふれていた水もまたたくま

に引いてゆきました。

「カッパどんのおかげじゃ、カッパの兄弟が助けてくれたんじや」

村人たちはやっと双児のカッパが自分たちをまもってくれる良いカッパだと気づきま

した。そして心からあやまり、荒川の水にも感謝したのでした。



荒川と人々

荒川は、その名のとおり「あばれ川」で、むかしから、たびたび大きな洪水をおこしてきた川ですが、流域の人々にとっては、大切な水をはこんでくれるだけではなく、ゆたかな流れは舟運を発達させ、物をはこび、人をはこび、文化もはこぶ、人々のくらしにはかかすことのできない、だいじな川でした。

それだけに人々は古くから積極的にこの川に取り組み、現在のすがたにまで育てつくりあげてきました。荒川の流れる秩父山地から発して、埼玉県、東京都とつらぬいて流れる長さ173キロメートルの大河川で、今も舟運は健在です。

お話は上流の小さな村のできごとですが、大雨がふればすぐ大洪水をおこしていた荒川のすがたや、川と人々とのかわりが、よくわかると思います。お話には、川をよごしたり、水をそまつにしてはならないという教訓もふくまれています。わたしたちも、川を大切にしたいですね。

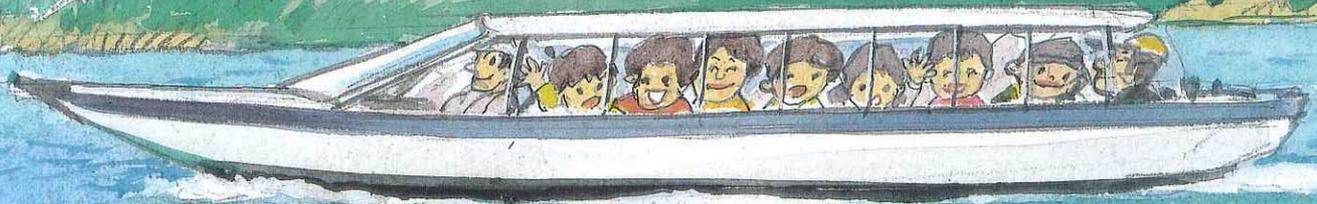
このお話は埼玉県寄居町にお住まいの山田えいじさんの協力により、山田さんの著書「荒川村の民話と伝説」より引用、再話したものです。

川の中から陸地をみる

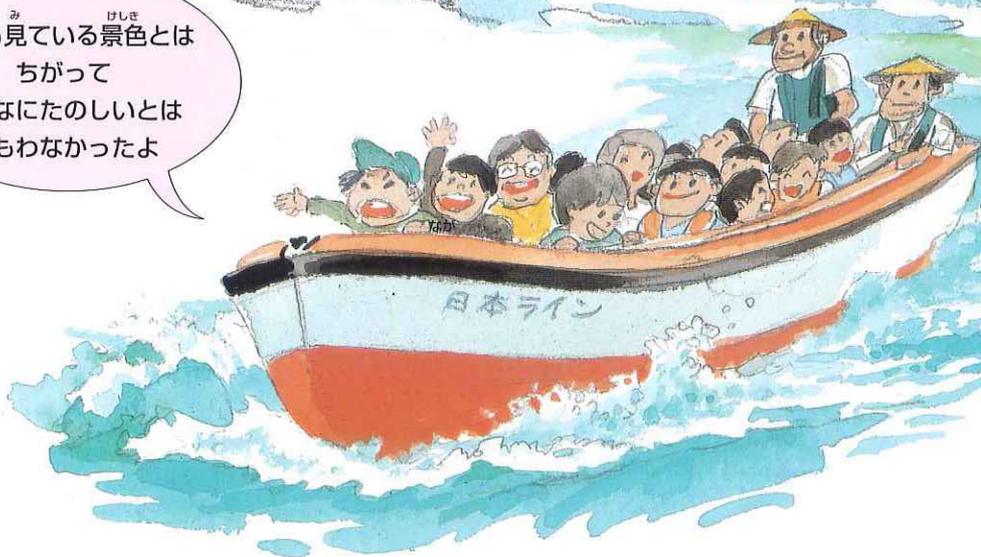


ていぼう
りっぱな堤防だな！
こうずい すい
洪水で水位があがっても
まち
街はこの堤防でまもられているんだ

かわ
川の中から見た川岸や堤防、
しがいち
市街地などの風景を実感してみよう。
あた
ふだんとはちがった新しい発見がきつとある。
むかし かわ
昔は川を使った舟運も全国で盛んだった。
ふなぐた
舟下りはそのなごりのひとつだよ。



み けしき
いつも見ている景色とは
ちがって
こんなにたのしいとは
おもわなかったよ





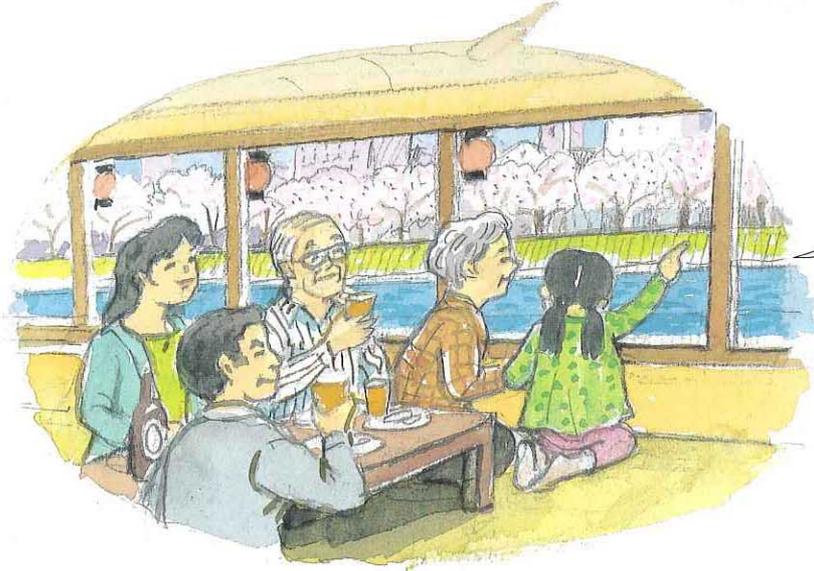
きゆうりゆう
さあ急流にはいりましたよ
しっかりつかまっています
ください

まんてん
スリル満点だよ

ひゃあ
ぼくたちなが
れているよ
みず
ちから
水の力ってすごいね



いつもより
はし おお み
橋やビルが大きく見えるね



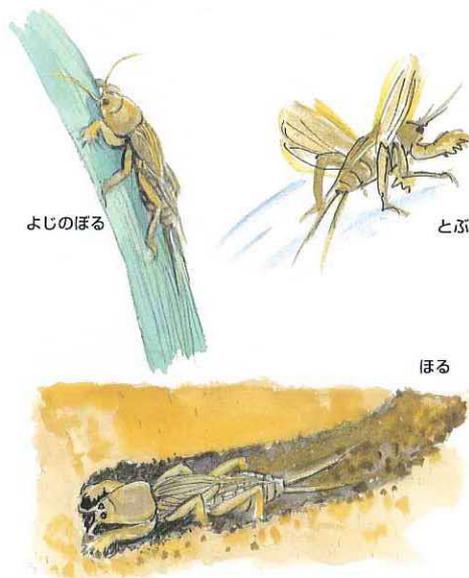
やかたぶね
屋形船だから
おじいちゃん、おばあちゃんもいっしょに
はなみ
お花見ができてよかったね

かんこうせん ていきうんこう
いろいろなタイプの観光船や定期運行の
すいじょう
水上バスがあります。
はるかぜ かわも みすどり きぶん
春風そよぐ川面から水鳥になった気分で
りくち み
陸地を見よう。

ええっ、ケラが川のなかま？

ぼくはバッタ目ケラ科、体長約3センチメートルの昆虫だよ。
オケラなんてよばれ、きみたち子どもには人気がある。
畑や草原にすむなかまがおおいのでね、「川のなかま」といわ
れるとちょっととれくさいけど、河原や土手にもすんでいて、じ
つは、泳ぐことができる陸の昆虫なんだ。身体にはこまかい毛が
生えていて、まるでビロードのような手ざわりだよ。その毛のお
かげで水をはじくからおぼれたりもしない。前足は大きい手のひ
らのようで水をかくのにもつごうがよく、泳ぐのはぼくの得意種
目の一つなんだ。得意種目はこれだけじゃないよ、羽根があるか
ら空もとべる、大きな前足で穴をほってもぐりもぐりもできる、草
などにのぼるのもうまいし、もちろん走ることもできる。昆
虫のオリンピックがあれば五種目競技の選手になることまちがい
なしさ。

ところが、ところが、くやしいことに人間のおとなというやつは、なぜかぼくをバカにしたようなことを言うん
だ。多芸でも、どれもいいかげんなことを「あれはケラ芸だ」とか「ケラ才だ」とかいうんだよ。それにお金がか
すってんてんになると「オケラになった」なんていうんだ。きみたち子どもにはそんなこといわれたくないなあ、
ぼくの能力をぜひ認めてほしいんだよ、おねがいしますね。



財団法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management

(〒103-0001) 東京都中央区日本橋小伝馬町11-9
住友生命日本橋小伝馬町ビル (2F、3F)

TEL (03) 5847-8302 (企画調整部) <http://www.kasen.or.jp/>